

「あなたに毒入りのお料理を食べさせたいわ！」
美しい母親に並んで料理を作る詩織が、振り向きもしないで叫んだ。

「おやおや、お嬢様には似つかわしくない恐ろしいお言葉ですよ。わたしが毒入りの料理を食べさせられて死んだら、お二人はどうなってしまうのでしょうかね。着の身着のままに投げ出されて路頭に迷うのですよ。奥様は、その身体で男たちに媚びながら生きていくのです。お嬢様のはしたないお言葉には罰が必要です。お嬢様の失言は、母親の奥様の責任でしょう。わたしが競り落とした奥様のパンティを今すぐわたしに返してもらいましょうか。」
夕子は手を止めるとスカートの中に手を差し込み、もぞもぞとさせていたが、やがて履いていたパンティを足から抜くと、卓也の座っている食卓に置いた。

「これでいいでしょ？あなたのお気に召すようにしましたわ。」
夫人の挑発的な姿だった。

「気に入らないな。そうだな、そのスカートも脱いでくださいよ。」
卓也はワイングラスに血のような真っ赤なワインを注ぎ込むと、にやりと笑った。夕子はキッチンに佇立し、あまりの屈辱に耐え忍んでいる。ここでスカートを脱ぐということは何も身につけていない下半身を晒すことになる。

「できませんか？それではお嬢様にやってもらいましょうか。」

「わかりました。脱げばいいのでしょうか。」

夕子はスカートに手をかけた。

「お母様、わたしがします。こんなこと恥ずかしくともなんともないわ。あいつを人間だと思っていないもの。」

「やめなさい！ママがします。」

夕子はスカートをすばやく脱ぎ去った。そして下半身を晒して立った。

「いい眺めだ。奥様のお尻がぷりぷりと動いて、それを眺めているだけで、最高の料理ですな。」

料理ができ、夕子と詩織も食卓に座った。夕子はまだスカートもパンティも履くことを許されていない。むき出しの臀部をいすに載せたまま、食事をしなければならない。

「今夜はハードな調教になりますから、奥様、たっぷりと食べてスタミナをつけておいたほうがよいでしょう。ワインも飲んでおきましょう。少しばかり酔っていたほうが痛みもやわらぎます。」卓也は血の滴るようなステーキをほお張りながら夕子を見た。夕子の表情は硬い。今夜の調教におののいているのだろうか。下半身を露出させたままでの食事に激しく羞恥しているからであろうか。

「お嬢様、お母様はね、今夜はいよいよお尻の調教を受けることを決心なされたのです。」

卓也は、夕子と詩織を交互に見た。母も娘も夕食に手をつけることなく、伏目がちに押し黙っている。

「奥様、お嬢様が心配なさっているといけません。今夜の調教について奥様の口からご説明なさい。どのような調教を奥様がお受けになるかお嬢様も知っていればそんなに心配なさることもないでしょう。」

卓也は上機嫌である。いよいよ今夜は夕子に尻穴調教を承諾させたのである。もちろん、夕子はしぶしぶといった調子であったが、それでも夕子の口から尻穴の拡張訓練をしてほしいと言わせたのだ。それは今朝のことであった。

「奥様、そんな悲しい顔をなさったままで黙っていてはお嬢様ももっと心配なさいますよ。今夜の調教については、詳しく教えたはずです。もう、お忘れになったのでしょうか。ご自分からお尻の穴の拡張をお願いしたのに、黙っていたらだめでしょう。」

そのとき耐え切れなくなった詩織は席を立ち上がった。母がこれ以上辱められる姿を見てられない。

「お嬢様、座っていてください！お嬢様が席をお立ちになると、お母様ももっと辛い調教をお受けしなければなりませんよ。お母様を助けたければ、そのまま座っていなさい！」

それまで猫なで声でいた卓也の声が鋭いものに変わった。その声に気おされたか、詩織はまた自分の席に座った。食卓の隣に座っている夕子夫人は、うつむいたまま悲しげな表情だ。自分の口からこれから行われる卑しく破廉恥な行為を娘に話すことなどできるものではない。

「それではわたしからご説明しましょう。」

卓也は立ち上がって、リビングに行くと、ビニル袋を手にして戻ってきた。ビニル袋の中は結構膨らんでおり、その中から長い箱を取り出して、詩織の目の前に置いた。

「それはね、今夜お母様のお尻に使うものですよ。お母様と一緒に先ほど買ってきたのです。」

ビニル袋をいったん卓也の座っていたいすの上に置くと、詩織の目の前の箱を開けた。中に入っていたのは、ガラス製の浣腸器である。

「これを使ってまずお母様のお腹の中をきれいにして差し上げます。何度も浣腸液を注入して排泄させ、お腹の中を空っぽにするのです。」

卓也は、箱からガラス製の注射器型浣腸器を取り出してそのポンプを引いたり押したりして見せた。怖ろしいほど大きな浣腸器である。

「これはね、五百CCの容量がある大型浣腸器なんです。普通はこんなに大きなものは使用しません。でもね、お母様のような立派なお尻をしていらっしゃる方には、これくらい大きな浣腸器でないとお似合いにならないのです。それにお母様もこの大きな浣腸器を一目見てお気に入りになり、買ってほしいとわたしにせがまれたのですよ。」

耳をふさぎたくなるような卓也の言葉が続く。卓也はワインに酔っており、饒舌になっている。

「浣腸でお腹の中を空っぽにしたら、これをいれてお母様のお尻の穴を開いていきます。」

卓也は自分の席に戻るといすの上に置いたビニル袋から、今度は複数本のゴム棒を取り出して詩織に見せた。詩織はうつむいたままだが、かまわず卓也は話し出す。

「このアナル棒でお母様のお尻を開くのです。これは一番細いものですが、だんだんこちらの太いものに代えていきます。時間をかけてゆっくりと拡張するのです。あわてればお母様のおきれいなアヌスを傷つけることになりますから、あせらず調教することが肝心です。わたしのものを受け入れることができるようになる

まで、お母様は毎晩お尻調教を受けるのですよ。」

卓也は、太さの違う4本のアナル棒を手にし、こわばった表情の母と娘の姿を交互に見て笑みを浮かべた。

「お母様にそんな恐ろしいことをしないでください。わたしが…
わたしが…」